今、平和を語る

武力で弱者は救えぬのだから

弁護士
国際人権NGO事務局長
伊藤 和子さん

平和は戦争のない状態にかぎらない。人権侵害にみられる構造的な暴力も平和の敵である。それは軍事政権の弾圧をはじめ、今も続いている。日本を本拠とする国際人権NGO（非政府組織）ヒューマンライツ・ナウの事務局長を務める伊藤和子弁護士に、「国境を越えた人権活動」について聞いた。

いとう・かずこ　早稲田大学法学部卒業後、1994年に弁護士登録。2004年にニューヨーク大ロースクールに客員研究員として留学、米国人権NGOでの国際協力弁護士などを経て06年に国際人権NGOヒューマンライツ・ナウの設立にかかわり事務局長に就任する。弁護士業の傍ら、人権活動家として国境を越えた活動を続けている。近刊にHRN編「国連グローバー勧告　福島第一原発事故後の住民がもつ『健康に対する権利』の保障と課題」（合同出版）がある。

――弁護士と人権活動家を両立させていますが、そのきっかけは。

伊藤　弁護士になって1年後の1995年に第4回「世界女性会議」が北京で開かれ、そこで世界の女性たちの人権侵害の被害を直接聞きました。ショッキングな報告ばかりでしたが、アフリカのルワンダから参加した女性の証言は、今も忘れることができません。

彼女は民族同士の内戦があった当時、結婚して子どもが生まれたばかりでした。ところが「民族浄化」と称して、他民族の民兵から夫と子どもを殺害されたうえ、その場で集団レイプに遭ったのです。ルワンダでは、「内戦を闘う武器」として、多くの女性たちが残虐なレイプの犠牲になったのです。

日本では想像すらできない被害を知った私は、何をすればよいのだろうと自問してきました。2006年になってやっと、弁護士仲間などに呼び掛けて国境を越えて人権活動をするNGOヒューマンライツ・ナウ（HRN）を設立したのです。

――そのHRNは、ミャンマー、フィリピン、カンボジア、イラクなどで、軍事政権による暗殺や虐殺の実態、さらには戦争がもたらす人権侵害を、現地調査をもとに告発してきました。一連の活動を詳しく記した著書「人権は国境を越えて」（岩波ジュニア新書）に次の一文があります。〈国連では、途上国の人権侵害は厳しく責任追及されるけれども、先進国の人権侵害の責任はほとんど問われることがない、という人権の二重基準（ダブル・スタンダード）が以前から問題にされてきましたが、いまだに改善される兆しはありません〉

伊藤　米国が「テロとの戦い」と称し、国際テロ組織「アルカイダ」の潜伏先とみなしたアフガニスタンへの軍事報復は、民間人の犠牲を出さない「きれいな戦争」だと報道されました。しかし、その後にアフガニスタンの難民キャンプを訪ねて、米軍の「じゅうたん爆撃」で多くの村が破壊され、たくさんの住民が殺されたという証言を聞き、真実が報道とあまりにかけ離れていることを知り愕然としました。超大国がスーパーパワーを振りかざして、「正義の戦争」という美しいストーリーを語り、それをメディアが流すことで、都合の悪い人権侵害の事実は意図的に隠されてしまうのだ、と思い知らされたのです。

以来、私は独立した第三者、市民の側の立場に立つ者、被害者の側に立つ者が、人権侵害の現場に行って詳細に事実調査をして、世界に人権侵害の真実を告発することが必要だと思いました。このような活動がない限り、弱い立場の人たちの人権侵害は歴史のなかでは「なかった」ことにされてしまうのです。

――中東を拠点にする武装組織「タリバン」や「イスラム国」の人権侵害は目に余ります。HRN編「人権で世界を変える30の方法」（合同出版）にこうあります。〈毎日殺すか殺されるかという戦闘状態にある兵士たちは、人命や人権に関する感覚が麻痺し、平和なときには絶対犯さない罪を簡単に犯してしまいます。こうして、戦争は最大規模の人権侵害をもたらしているのです〉。このことは、武器を手にする過激派武装集団にも共通しているようです。

伊藤　兵士は戦争という極限状況で、大量の人間を平然と殺すことを厭わない者として訓練される。「正義の戦い」とか「聖戦」というそれぞれの大義のために残虐行為を進んで行うよう訓練されます。それは正規軍でも武装集団の兵士でも本質は同じです。

イスラム国のような過激派組織が生まれた背景には、米国やイスラエルのたび重なる武力行使があります。暴力には暴力をもって応じる「テロとの戦い」は憎しみを増幅させてきました。平和を実現したり、女性を解放したりすることは決してありませんでした。

――日本のODA（政府開発援助）に関して、「人権は国境を越えて」に書かれました。〈人権侵害について見て見ぬふりをし、人権侵害をしている政府に黙ってお金をつぎ込めば、人権侵害を行う軍や治安部隊等は強化されるばかりです〉

伊藤　ODAでいま最も憂慮するのは、安倍政権がこれまで厳しく制限されていた「軍が関わる活動への援助」を解禁することを含む新しい「開発協力大綱」を公表したことです。特定秘密保護法、集団的自衛権の行使、武器輸出三原則の緩和、そして軍へのODA援助と、日本は確実に戦争に加担していく方向性に向かっています。その行きつく先は、戦争による人権侵害の加害者になるということ、それは絶対にあってはならないことです。

日本政府が最近、日本の人権状況を批判する国際社会の声にも敵対的な態度をとっていることも懸念されます。

――日本に対する人権問題への批判とは。

伊藤　国連人権理事会が選任した「健康に関する権利」の特別報告者が昨年5月、福島の原発事故による低線量被ばくを重視した対策に転換するよう日本政府に勧告しました。しかし、日本政府は「非科学的」だなどとして敵対的な態度をとり、応じていません。

いわゆる「従軍慰安婦」についても、国連人権高等弁務官が「女性たちに対する人権侵害は、（日本政府の）正義と補償が実現しない限りつづく現代的な問題だ」と提起したことに対して、まったく応えていません。戦争のために女性を性奴隷にする「慰安婦」制度は、戦時下の女性に対する重大な人権侵害行為として将来にわたり根絶されるべきであるのに、日本政府は歴史を修正しようとする発言を繰り返しています。しかし、国際社会のコンセンサスから逸脱した言動は日本の信用をおとしめています。人権尊重という国際社会の基本的な価値観や常識に謙虚であるべきです。

――21世紀を真の人権の世紀にするには。

伊藤　「タリバン」の銃撃に負けず、声をあげ続けたパキスタンの少女マララ・ユスフザイさんの勇気は素晴らしいです。史上最年少の17歳でノーベル平和賞を受賞したのもうれしい。

人権侵害をなくすには市民一人一人の力がなにより大切です。市民が国境を越えてつながり、人権の侵害を明らかにして世界に伝え、人権侵害や差別を許さない世論や文化をつくり続けていく、その責任を問い続けることが大切です。マララさんが勇気をもって、その実例を私たちに示してくれたように。

聞き手・専門編集委員　広岩近広

ミャンマーで女性団体のリーダーや政党関係者に人権教育をするHRNのメンバー。左端が伊藤和子さん　＝ヒューマンライツ・ナウ提供

＝次回は12月15日掲載予定

マララさんに続き、声あげねば

しあわせのトンボ

近藤 勝重

白菜とキャベツ

人が来て、鍋物が食べたいという。ぼくが白菜を買いに行くことになった。というより、白菜いるだろ？とぼくの方から買いに出掛けた。

前の晩、坂口昌弘氏の「文人たちの俳句」でこんな句を知った。

塵（ちり）の世に清きものあり白菜哉

寺田寅彦の作である。「都会の塵を身につける」と言ったりもするが、世間と白菜の対比に心が動いた。

なるほど、真っ白だ……。スーパーで半分に切られた白菜を目にして、こんな白さと比べたら、薄汚れた世の中など慨嘆するしかないだろう。誰の句であったか、洗い上げた白菜と妻の輝きを抱き合わせにして詠んだ句があり、そんな奥さん、うらやましいなあと思った記憶がある。

スーパーでは白菜の近くにキャベツが置いてあった。共に結球型で、手にするとずしりと重い。季節的にはキャベツは夏、白菜は冬というこになっているが、年中食卓には欠かせない野菜だ。ただし持ち味はまるで異なる。キャベツは鍋物には向かず、炒めたり、生のまま刻んで食べたりするに限る。

そのキャベツにも触発されたのだろう、買い物から帰って早々、白洲正子さんの「いまなぜ青山二郎なのか」という文庫本を取り出した。

ここに登場する人物は実にリアルに描かれているが、とりわけ印象に残ったのが小林秀雄氏だ。詩人中原中也の恋人だった女性と同居したものの、ある朝、ついに彼女から逃げ出す。白洲さんはこう書いている。

〈ある晩、彼女は荒れに荒れて、一睡もしなかった。小林さんはそばにつきっきりで面倒をみていたが、夜が明けたので外へ出た。その頃小林さんの母上は畑で野菜を作っておられ、キャベツがいっぱい朝露をあびて、きらきら光っているのを眺めているうちに、「もうこれでいい。するだけのことは全部した。思い残すことはない」と、はっきり自覚したそうである〉

鍋を囲んで男数人が話題にした。

「朝露きらきらだろ。嫌になったんじゃないか、ドロドロが」

「こういうのって、解釈しちゃダメなんじゃないか」

「そう、解釈した途端、キャベツのきらめきがうせるだけだ」

みんなうなずいて、後は白菜の漬物談議で盛り上がった。

（客員編集委員）

＝次回は12月15日掲載予定